

R6 小中高研究総論

グローバル社会を協働的に創造する資質・能力の育成

～グローバル市民コモン・ルーブリックを活用した学習のあり方～

1. 研究の背景と目的

(1) 社会的背景

現代は予測が難しく、変化の激しい時代である。そして、その変化は今後より急激に進み、現存しない職業に就いたり、技術が求められたり、これまで直面したことのないような問題を解決することが求められるようになると言われている。実際に、新型コロナウイルス感染症の拡大により、このことが現実のものとなった。日常の急激な変化と先が見えない日々の中で、いかにして生活を進めていくかを考え、行動することが求められる。こうした急激に変化する社会に対して、子どもたちはどのような力を育むことが必要なのだろうか。

学習指導要領(小中学校平成29年告示・高等学校平成30年告示)の改訂の経緯においても、今の子どもたちや、これから誕生する子どもたちが成人して活躍する頃には厳しい挑戦の時代を迎えていることが予想されている。子どもたちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め概念的知識の獲得を実現した上で情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築すること(*5)ができるようにすることが学校教育において求められているとされている。

また、OECD(Organisation for Economic Cooperation and Development:経済協力開発機構)においては、2015年から”OECD Future of Education and Skills 2030”プロジェクト(以下、「Education2030 プロジェクト」と表記)を進めてきた。「Education2030 プロジェクト」でも示されており、2030年はより”VUCA”な時代となることが予想されるという。VUCAとはvolatile,uncertain,complex,ambigusの頭文字をとった言葉であり、より「予測困難で不確実、複雑で曖昧」(*2)な時代になるということを意味するものとして使われている。「Education2030 プロジェクト」の提案書においてもこのプロジェクトの目的として、「2030年のより予測困難で不確実、複雑で曖昧となる世界に向けて、生徒が準備していく『コンピテンシー』をよりよく理解するための枠組みを構築する」(*2)ことが明記されている。ここでいう「コンピテンシー」とは、ある職務または状況に対し、基準に照らして効果的、あるいは卓越した業績を生む原因として関わっている個人の根源的特性とされ



▲ OECDのEducation2030プロジェクトで創り上げた
ラーニング・コンパス (学びの羅針盤)

ている。具体的には、動因、特性、自己イメージ、知識、スキルから構成されている。これに追加して AI の発達や移民の増加などは 2000 年代に入ってから大きなトレンド（傾向）として考えられるが、他にも地球温暖化による環境の変化や家族の形態の変化など、様々な変化が生じている。さらに、国や文脈や時代によって「求められるコンピテンシー」もまた変わってくるとされている。

結局のところ、「コンピテンシー」としては、多種多様なものが想定されるとしても、それが重要なもの、あるいは「キー・コンピテンシー」となるものかどうかは、それぞれの文脈において求められるかどうかによるのである。別の言い方をすれば、「コンピテンシー」とはある文脈では非常に重要なものであっても、別の文脈では重要なものとはされないと考えられている。

このような時代の変化や必要な資質・能力に対して、OECD は 2019 年 5 月に「ラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」を公表した。これは、生徒が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任ある意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調することが意図されたものである。知識、スキル、態度・価値という「コンピテンシー」の構成要素をコンパスの針とし、さらに「より良い未来の創造に向けた変革を起こす力」（①新たな価値を創造する力、②対立やジレンマに折り合いをつける力、③責任ある行動をとる力）をコンパスの外側に、さらにその外周を沿うように、見通し（anticipation）・行動（action）・振り返り（reflection）の「AAR サイクル」を示し、個人のみならず社会の「ウェルビーイング」（究極的に人々が心身共に幸せな状態）をめざして学んでいくというイメージを描いている。その道を照らして歩いていく原動力となるのが「生徒エージェンシー」であり、ラーニング・コンパスの中心概念においても「生徒エージェンシー」がある。そして、エージェンシーを「より良い未来の創造に向けた変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」（*1）として定義づけている。

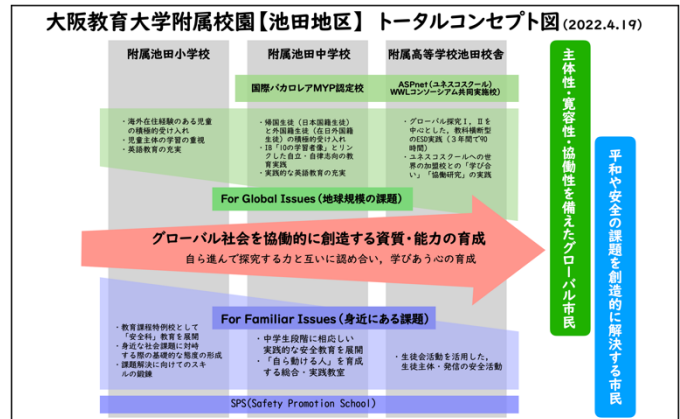
その「生徒エージェンシー」は自分 1 人だけで育まれるものではなく、親や仲間、教師やコミュニティなど、周囲との関係性の中で育まれていくとされている。そこで必要となるのが、「共同エージェンシー（Co-agency）」であり、生徒を取り巻く周りの親や仲間、教師やコミュニティなどとの関わりの中で学習していくことが大切とされている。特に、集団や社会のレベルのエージェンシーを発揮していくためには、めざすべき方向を共有しながら、一人一人が社会的な責任を果たしていくことが重要になってくる。

日本に目を向けると、現行の学習指導要領の下で学校教育が実施されるのは概ね 2020 年から 2030 年であり、2030 年に向けての教育という OECD の考え方に一致している。OECD のラーニング・コンパス 2030 の開発においては文部科学省も参加しており、共通した考え方が現行の学習指導要領に取り入れられている点もあると思われる。学習指導要領の中には、「エージェンシー」という言葉は使われておらず、エージェンシーを育むことについても、直接的に述べられているところはない。しかし、学習指導要領を読み解くと、OECD の提唱しているエージェンシーの概念と類似した考え方を示している部分もある。グローバル化する時代においては、多くの課題が複雑に絡み合っており、それらの課題を解決するためには多様な考え、価値観を持つ人々と見方・考え方を共有し議論を重ねることが一層求められる。すなわち、このような VUCA の時代の中、これからの社会を創り出していく児童・生徒がグローバル性を育む必要が出てくる。

(2) 池田地区の研究背景

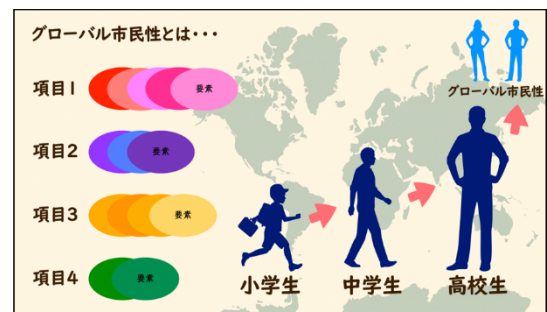
池田地区は、トータルコンセプト図に則り、2019 年度より「社会とつながり明日を切り拓く資質・能力の育成」を共通の研究テーマに掲げ 4 年間研究に取り組んできた。Familiar Issues（身近にある課題）や、Global Issues（地球規模の課題）に対して、自ら考えながら「つなぐ力」を持った子どもの育成に取り組んできた。実

際に、池田地区の12年間の学習の中には、各教科の授業をはじめ、総合的な学習の時間、多種多様な学校行事、安全教育、国際バカロレア MYP プログラム、グローバル探究などの WWL 関連カリキュラム、国際枠生徒の受け入れなど、子どもたちにとって、グローバル性を育む重要な学習機会がある。そうであればこそ、池田地区としては、12年間の子どもの発達に則し、多様性を認めながら個々の可能性が伸びる学習目標やそれらを見取る評価規準・基準が必要となってくる。しかし、現状では、12年間の発達を見据えた学習目標や評価規準・基準が明確ではなく、曖昧になりやすいという課題がある。



(3) めざす児童・生徒像と主題設定の理由

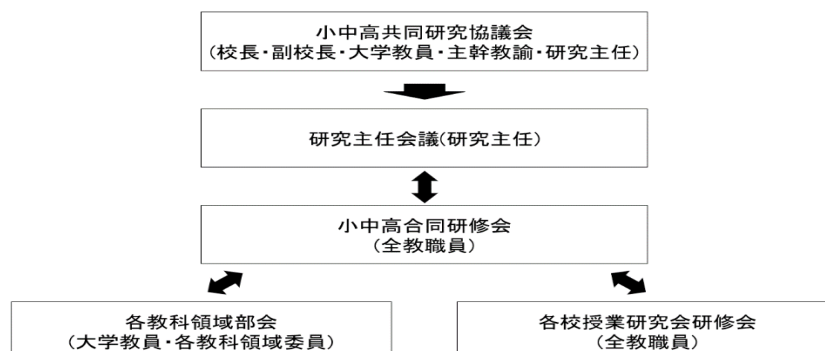
上記で述べたような時代背景や地区の課題を踏まえ、池田地区のトータルコンセプト図にもあるとおり、池田地区では、「平和や安全の課題を創造的に解決する市民」とあるとともに「主体性・寛容性・協働性を備えたグローバル市民」として、グローバル社会を協働的に創造することができるような人材を、12年間の教育を通して育成することをめざしていくこととしている。それでは、「グローバル市民」に必要な資質・能力とはいったい何か。目の前にいる子どもの姿を見取ることを通して、「グローバル市民」とは何かを明らかにし、その資質・能力の育成に向けた共通・ループリックの作成および教育法の開発を展開していく。



2. 研究運営・研究の進め方

(1) 研究組織

池田地区では、下の図のように各校種が協働的に研究を進められるよう研究組織を編制している。「小中高共同研究協議会」では、池田地区の現在と将来像を管理職・大学教員・主幹教諭・研究主任で議論している。それをもとに「研究主任会議」で協議を重ね、論点を整理した提案を策定し、「小中高合同研修会」にて提案する。そして、「小中高合同研修会」における共通理解を基に、「各教科領域部会」や「各校授業研究会研修会」で理論を深めていくこととしている。



池田地区の研究組織図

(2) 研究の進め方

本研究でめざすところは、上記でも述べているように池田地区として12年間の教育活動を通してグローバル社会を協働的に創造することができる人材を育成することにある。そのために、3年間を通して次のように研究を進めていく。

1年次は、池田地区がめざす「グローバル市民に必要な要素」とは何なのかを「探る」。「探る」とは、子どもの学びの姿を見取る作業から始まる。日々の授業や教育活動の中で、「グローバル市民に必要な要素」を発揮している姿が垣間見える場面は、多様に存在すると考える。その多様な場面を見出し、小中高の12年間の発達の段階と照らし合わせながら、系統的に分析していくことで、「グローバル市民に必要な要素」とはどのようなものか、それが育つ過程とはどのようなものかが明確になってくると考える。そして最終的に、小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校の3年ごとの発達の段階を踏まえた「コモン・ルーブリック」を作成する。

2年次は、1年次に作成した「コモン・ルーブリック」を基に、各教科領域や各学校行事等にローカライズさせた教育活動を行う。それらの教育活動の中で培われる力を明確にすることで、より実践的で汎用性のある「コモン・ルーブリック」の活用が図ることができると考える。

3年次は、それまで開発してきた「コモン・ルーブリック」を評価・検証することとなる。2年間の研究で、様々な教育活動や子どもの姿から仮説的に立てた「グローバル市民に必要な要素」について見直し、さらには「グローバル市民に必要な要素」が育つような教育活動が成されているのかを評価する必要がある。評価の視点として、短期的な授業での見取りだけでなく長期的な児童生徒の変容を基に判断していく。

以上のように、本研究では「グローバル市民に必要な要素」を子どもの学びの姿から見取ることを足掛かりにする。そして、その「グローバル市民に必要な要素」が育ち、発揮される学びについて、段階的に研究を進めていく。

(3) 1年次の取り組み

1年次は、「グローバル市民に必要な要素」を明らかにしていくために研究を進めてきた。そこで、各校種の人数が均等になるように9班のチームを作成した。このチームは、教科の専門性という枠組みにとらわれないものとなっている。理由として、「グローバル市民に必要な要素」を教科の枠を超えた視点で見取り、児童生徒が12年間の教育活動を経たのちに必要となる力を幅広い視点から探るためである。

まずは、5月～7月にかけて各校種による相互授業参観を行い、子どもたちの姿から「グローバル市民に必要な要素」を見取った。これは、日々の授業の中に「グローバル市民に必要な要素」を発揮している姿が垣間見える場面は、多様に存在するという仮説から実施したものである。そのため、子どもの姿から「グローバル市民」を構成する要素を多角的に見取り、その後分類することで整理することとした。構成要素は、「発信する力」「表現力」のように類似するものも合わせると32もの要素となった。

整理する方法として、まずはOECDのDeSeCoプロジェクト(Definition and Selection of Competencies)で示されたキーコンピテンシーに関する「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」「相互作用的に道具を用いる」の3つのカテゴリーをもとに、32の構成要素を分類した。これは、「どのような文脈であっても適用できる、汎用性の高いコンピテンシーを特定しよう」(*2)とするDeSeCoの考え方を取り入れるためである。そして、池田地区という文脈に即して構成要素を整理するために、トータルコンセプト図をもとに構成要素を関連付け次の4つにとりまとめた。

主体的な人	自ら進んで行動し、自己調整しながら、自律的かつ粘り強く物事に取り組む
つなぐ力のある人	様々な知識と世の中の出来事とを関連づけて考えたり、多様な人とのつながりを大切にしたりする
探究力のある人	身近なものごとや世界の出来事に関心を持ち、夢中になって真理や理想を探究する
寛容な人	身近な他者や異なる文化の価値観をも尊重し、互いに認め合う

上記で示した4つの要素が「グローバル市民」を構成するものである。そして、4つの要素を小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校の3年ごとの発達段階を踏まえて「コモン・ルーブリック」を作成した。

「グローバル市民」 コモン・ルーブリック

項目	高等学校	中学校	小学校	
			高学年	低学年
主体的な人	これまでの経験や学んだこと、 新たな試みの視点 などから目標を持ち、その達成に向けて 自主的に粘り強く、創造的に 取り組むことができる。	これまでの経験や学んだこと、 試みの視点 などから目標を持ち、その達成に向けて 自主的に粘り強く 取り組むことができる。	これまでの経験や学んだこと、 試みの視点 などから目標を持ち、その達成に向けて 自主的に 取り組むことができる。	これまでの経験や学んだことから 目標 を持ち、その達成に向けて 進んで 取り組むことができる。
つなぐ力のある人	これまでの経験や知識を関連づけて 創造的に 物事を考え、 周りの人たちや異なる文化圏の人たちとの協働を構想・実践 することができる。	これまでの経験や知識を関連づけて物事を考え、 地域社会の人たちとの協働を構想・実践 することができる。	これまでの経験や知識を関連づけて物事を考え、 学校の人たちと協力して取り組む ことができる。	これまでの経験や知識をもとに物事を考え、 学級の人たちと力を合わせて取り組む ことができる。
探究力のある人	自らの問題として、 身近なコミュニティや世界の出来事 から課題を見出し、その解決に向けて取り組み、 振り返りながら、創造的に追究 することができる。	自らの問題として、 身近なコミュニティ から課題を見出し、その解決に向けて取り組み、 振り返りながら追究 することができる。	自らの問題として、 身の回り から課題を見出し、その解決に向けて取り組み、 振り返り することができる。	自らの問題として、 身の回り の課題に気づき、その解決に向けて取り組むことができる。
寛容な人	他者の意見や考え方に対して 共感と傾聴 の姿勢で接し、 多様性を尊重しながら相互理解 を深めることができる。	他者の意見や考えに対して 共感 の姿勢で接し、 多様性を受け入れ相互理解 を進めることができる。	他者の意見や考えに対して 共感の姿勢 で接し、 相互理解 を進めることができる。	他者の意見や考えに対して 共感の姿勢 で接することができる。

(4) 2年次の取り組み

2年次は、1年次に作成した池田地区「グローバル市民コモン・ルーブリック」を、あらゆる教育活動に具体的にローカライズしていく。教科授業だけでなく教科外活動にも、このコモン・ルーブリックを活用して、池田地区における12年間の教育活動全体で、「主体的な人」「つなぐ力のある人」「探究力のある人」「寛容な人」を育てることをめざす。

コモン・ルーブリックをローカライズする流れは、次のとおりである。

- ・ 4つの「人」のうち、教育活動（授業の単元、学校行事など）で育みたい「人」を1つ以上選択する。
- ・ 選択した「人」と学習内容とが、どのように関連しているのかを言語化する。池田地区「グローバル市民コモン・ルーブリック」は、あらゆる教育活動に用いることを想定しているため、抽象度が高い文言で表現されている。その文言を、各教科・各行事の特性と関連付けて具体的に解釈・説明し、言語化する。
- ・ 選択した「人」を育てていくために、どのような「力」を身につけさせるかを言語化する。
- ・ 身に付けさせたい「力」が備わったかどうかについて、どのように評価するかを言語化する。
- ・ 教育活動を終えた後に、実践内容をまとめて、成果と課題をふりかえる。

このコモン・ルーブリックを活用することのねらいは、池田地区における12年間の教育目標を「見える化」・「意識化」することである。これまでも、池田地区全体で安全教育に取り組む・国際教育に取り組むという共通目標はあった。小中高間で協働でカリキュラム設計されている教育活動もあった。とはいえ、小学校1年生から高校3年生までの、12年間という教育期間は非常に長い。子どもの発達段階の違い、義務教育か否か、教科性が強いかな否か等の要因により、小中高全体で教育に取り組むという視点が充分だったとは言い難い。しかし、コモン・ルーブリックを活用することで、各授業・各行事の計画段階に、校種固有の教育目標のみならず、池田地区全体の教育目標も必然的に意識することになる。また、小中高の教員で相互授業参観をしたり指導案検討をしたりする際に、各校種特有の文化や特性にこだわらず、池田地区の教育目標に照らし合わせた議論をすることが可能になり、池田地区全体の12年間連続した教育改善につながる。このようにして、総勢80名弱の小中高教員が、同じ教育目標・共通言語をもって、子どもたちの成長・発達に関わっていけるようになることを、池田地区としてめざしていく。

(5) コモン・ルーブリックをローカライズして活用することについて

上で述べたように、コモン・ルーブリックとは、教育活動全般にわたり、子どもの学習や成長を評価するための共通の基準や目標を設定するツールである。これをローカライズ(学校や学年、教科、行事ごとに具体化)することにより、多様な学習場面や行事において一貫した教育目標を持つことができる考える。

以下4つの項目に分けてコモン・ルーブリックの活用することで期待されることについて述べる。

①池田地区における教育活動の共通認識

コモン・ルーブリックをローカライズすることで、全ての教育活動において一貫した目標と評価基準を適用できる。これにより、教員間での評価のズレが少なくなり、子どもに対しても明確な期待と目標を伝えることが可能となる。12年間で同じ基準を用いることで、子どもの成長過程を同じ目線で追跡できることが期待される。また、コモン・ルーブリックを活用した目標設定を子どもと教師とで共通認識することにより、教員間だけではなく子どもとの意識のズレも少なくなり、教育効果が高まると考える。

コモン・ルーブリックを子どもと共有することは、子どもにとっても学習の意欲を向上させる要因となると考える。授業や行事において明確な目標と評価基準を設定することにより、子どもは自らの達成度を客観的に理解することができる。また、自分の強みと弱みを把握することで自己成長に向けた具体的な行動をとることが可能になることが期待される。

②各教科・行事への具体的な適用

様々な教科や行事において、コモン・ルーブリックをそれぞれの特性に合わせてカスタマイズすることで、より具体的で実践的な目標設定と評価が可能になる。例えば、数学の授業では「主体的な人」として、自ら問題解決のプロセスを進め、計画的に取り組む姿勢を評価する。体育大会では、「つなぐ力のある人」として、チームワークや協力の精神の目標設定と評価する。このように適用範囲を広げることで子どもの多面的で多角的な成長を促進

できるとともに教科活動をはじめとする様々な教育活動の目標に整合性が生成されることが期待される。

③教育活動の改善とフィードバックを通じたコモン・ルーブリックの永続的な改善

小中高の12年間でコモン・ルーブリックを活用することにより、教師は子どもの達成度や学習過程について詳細なフィードバックを行うことが可能である。これにより指導方法やカリキュラムの改善も容易になると考える。また、様々な学習活動においてコモン・ルーブリックのローカライズを行い、より池田地区に適応した形にするべく改善策を探し出していく。このようなコモン・ルーブリックの定期的な評価を通して、目標設定の見直しを行うことにより、子どもの実態にあったコモン・ルーブリックの改善が図れることが期待される

3. 引用・参考文献

- *1 秋田喜代美ほか 2020 「OECD Learning Compass 2030 仮訳 OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030」
- *2 白井俊 (2020 年) ミネルヴァ書房, 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来-ニューエージェンシー資質能力とカリキュラム-』 P.10,P.33
- *3 文部科学省(平成 29 年度告示) 『中学校学習指導要領解説【総則編】』
- *4 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室 「OECD Education 2030 プロジェクトについて」
- *5 文部科学省 中央教育審議会 2016 年 12 月 21 日「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」